

保育をつなぐマネジメントのあり方

保育アプリ活用の改善プロセスを通して

園名

氏名

六満こども園

内海 貴子

保育アプリの活用の取り組みを通して、保育をつなぐマネジメントのあり方を考察した。コロナ禍を経て、保護者から「園での子どもの様子をもっと知りたい」という声が寄せられたことをきっかけに、保育者の意見を取り入れながら導入を進めた電子連絡帳。DXを活用しても保護者とのつながりを大切にすることを目指し、配信方法や頻度を話し合いながら工夫した結果、家庭との関係が深まり、保護者からは「子どもの姿がわかってうれしい」「家庭での会話が増えた」といった声が聞かれ、親子間のコミュニケーションのきっかけにもつながった。

また、研究を進める中で、電子連絡帳の活用が保育者間の情報共有や若手職員の育成にもつながり、園全体のマネジメントに良い影響をもたらしていることに気づいた。情報を伝えるだけでなく、職員同士の学びや支え合いを促すきっかけとなり、互いを尊重しながら協働する「リスペクト型マネジメント」の実現を目指した実践研究である。

保育をつなぐマネジメントのあり方

—保育アプリ活用の改善プロセスを通して—

六満こども園 内海 貴子

1. はじめに

筆者は、六満こども園にて平成21年より保育士として勤務し、現在主任2年目である。ここでは、主任としてPDC Aサイクルを活用しながら、保育の質の改善に取り組む過程を記述し、マネジメントのあり方について考察したい。その際、主任1年目より活用を開始した保育アプリの電子連絡帳機能を事例として、保護者と保育者の関係性や園運営をよりよいものとしていくための手立てについて考えてみたい。

2. 園の概要

本研究は京都市中京区にある幼保連携型認定こども園「六満こども園」における実践的な取り組みを対象としたものである。本園は昭和27年に満福寺境内にて京都府の認可を受け「六満保育園」として開園し、昭和47年には「社会福祉法人 六満学園」として法人認可を受けた。平成30年に「幼保連携型認定こども園」に移行し、現在の開園時間は7時～19時まで、定員は150名であり、対象は産休明けから就学前までの子どもたちである。また同法人が運営する「六満こどもの家」（京都市認可夜間保育所 定員20名）および「六満こども館」（児童館 定員40名）が同じ敷地内に併設されており、たくさん子ども・保護者・保育者が日々関わり合いながら生活している。仏教保育を礎とし「たくましい体とゆたかな心」を教育・保育の目標として、笑顔で頑張る元気な子、人を思いやれる優しい子、勇気を出して未来へはばたく子の成長を願い、日々保育をしている。

3. 研究の目的と方法

1) 保育アプリの電子連絡帳機能活用の経緯

コロナ禍においては、送迎時に保護者が園舎内に立ち入らない形で子どもたちを受け入れる体制へ変更していたが、令和5年度より通常体制に戻し、登降園の送迎時には保護者が園舎内に入る体制に戻した。しかし、令和5年度末に実施した保護者アンケートにおいて「保育の様子がよく分からない。」「保育の様子をもっと知りたい。」という意見が寄せられたことを受けて、園で既に利用していた保育記録アプリに備わっている電子連絡帳の機能の活用を検討し、導入することを決めた。令和5年度以前における保育の様子を伝える方法は、送迎時の口頭による伝達、保育室内のホワイトボードへの記入、保育室または園舎玄関への写真掲示の3つであった。写真掲示に関しては、パソコン操作による印刷作業を写真係が担当しており、クラス担任以外が担っていることが多く、工程が煩雑で

あった。この3つの方法に加えて、令和6年度より電子連絡帳機能を活用し、写真を添えてクラス毎に保育の様子配信を開始した（表1参照）。導入にあたっては、保育者の業務負担にならない方法を、室長会、職員会で話し合い、配信回数は週1回とし、配信の曜日は担任に任せること、若手職員の記入は室長が確認した上で、園長および主任が文章と写真を最終確認し、配信することを決めた。

表1 保育の様子を伝える方法

	口頭	ホワイトボード	写真掲示	電子連絡帳
よさ	個人の様子を伝えられる	手軽である	写真の枚数が多い アップの写真が可能で様子がよくわかる	担任自身のタイミングで作業可 室長→主任→園長のチェックや修正が容易
課題	担任に会えない 保護者の存在	スペースがなく 詳しい内容が入れられない	プリントアウト・コメントに時間と手間がかかる	写真の枚数は4枚が上限 ダウンロードができてしまう →遠景にならざるを得ない

2) 研究目的

現在、園におけるDX化の推進は保育者の業務負担の軽減と、効率的な業務遂行にとって不可欠となっている。保護者への情報共有に関しても「言葉で長々とエピソードを書かなくても、写真と簡単なコメントで伝わる」（小泉・佐藤, 2017, p. 10）ように、視覚的情報を利用したものにニーズが高まっている。さらに、写真や動画は「①たくさんの情報を、②正確に、③簡単に伝達できること」（浅井, 2019, p. 32）と視覚的な情報伝達の有用性が示されている。

このような状況の中で活用を開始した電子連絡帳機能の導入にあたっては、トップダウン型の指示によるものではなく、保育者の意見を尊重するボトムアップ型のリーダーシップに着目した。「組織改革の大きな鍵は、子どもの姿ベースのサイクルを構築すると同時に、職員間が互いの良さに着目し、認め合う関係が構築される『リスペクト型マネジメント』にある」（大豆生田, 2022, p. 14）という理念に基づき、丁寧に意見を聴きながらよりよい方法を一緒に考え、利用方法の試行錯誤を重ねるプロセスを重視した。

保護者アンケートおよび保育者へのインタビューを通じて、保護者のニーズに応えつつ、保育者の働き方との両立を図るための改善プロセスに着目し、電子連絡帳の活用を通じて、よりよい情報共有のあり方を検討する。また、この取組を通して、園内のコミュニケーションや職員同士の協働意識の高まりの変化についても明らかにすることを目指すことを目的とする。

3) 研究方法

保護者へのアンケートおよび保育者へのインタビューを通じて意見を収集し、PDCAサイクルを活用して保育の質の向上を図ったものである。調査対象は、六満こども園に在園する保護者および保育者で、調査は2段階に分けて実施した。調査にあたっては、個人が特定されないように個人名や所属クラスなどを記載しないように配慮した。

《第1次調査》

令和6年度4月より電子連絡帳機能を活用した配信を開始し、2学期が経過した時点で、保護者および保育者がどのように捉えているかを把握するため、以下の調査を実施した。

- ・保護者への調査：令和7年1月にGoogle フォームを用いたアンケートを実施。

アンケートは、必須の選択項目と任意の自由記述欄を含む形式とした。

- ・保育者への調査：令和7年2月から3月にかけて、1対1の個別インタビューを実施。

その後、保護者アンケートの結果を保育者間で共有し、負担にならない範囲で改善できる点を室長会で検討した上で、職員会で話し合い、令和7年4月から改善点を反映した配信を開始した。

《第2次調査》

改善を加えた配信を令和7年4月より開始し、改善後の捉え方について再度調査を実施した。

- ・保護者への再調査：令和7年6月第1次調査時点も在園していた保護者を対象に、同様の形式でアンケートを実施。

- ・保育者への再調査：令和7年7月に、再度1対1のインタビューを実施。

これらの調査結果を比較・分析し、電子連絡帳の活用における改善の効果と課題を明らかにした。

4. 結果と考察

1) 第1次調査の結果と考察

《保護者》

◇ 実施日：令和7年1月

◇ 実施方法：Google フォームによるアンケート（選択式10項目・自由記述5項目）

◇ 回答数・回答率：有効回答数119名（対象者126名）、回答率94.4%

◇ 自由記述数：53（項目数595）、記述率8.9%

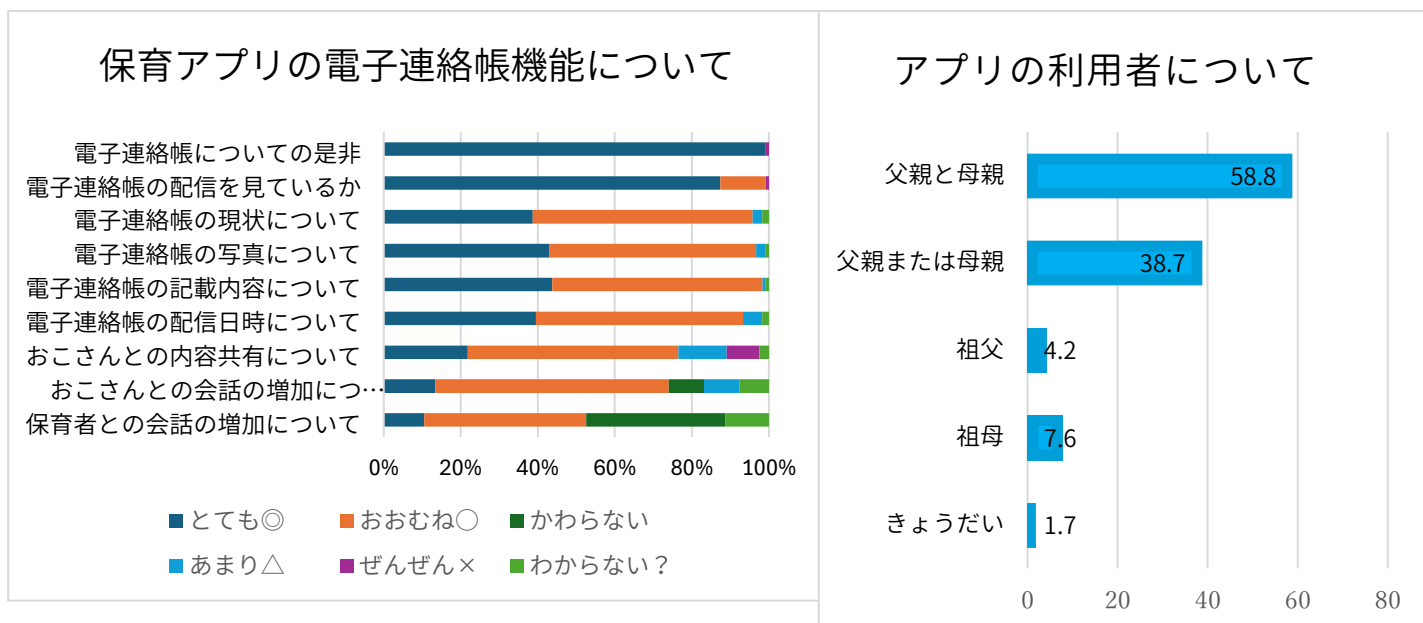


図1 第1次保護者アンケート結果

自由記述欄の主な内容（抜粋）

<園での子どもの様子>

- ・子どもがまだ話せないので活動内容を知るきっかけになる。
- ・園での自然な様子が見られて嬉しい。
- ・配信のおかげで園生活を具体的にイメージできる。

<園での出来事の共有>

- ・園での様子が分かり、子どもとの会話が増えた。
- ・写真を見ながら子どもが話してくれるのが嬉しい。
- ・毎日の内容が分かり、家庭での会話に活かしている。
- ・思い出を共有できてありがたい。

<園での活動そのものへの関心>

- ・我が子が写っていないなくても楽しみにしている。

<意見・要望>

- ・丁寧に書いていただき感謝。保育者への負担が心配。
- ・毎日配信があると嬉しい。
- ・アップの写真や枚数を増やしてほしい。
- ・更新頻度を上げてほしい。
- ・「今日の〇〇ぐみ」+写真でもいいのでは。
- ・午睡や給食の日常の写真も見たい。

多くの保護者がアンケートに回答し、電子連絡帳によって、園での子どもの様子を具体的に把握できるようになったとする意見が多かった。写真を通して子どもの活動や表情を見ることに対して、保護者は満足感を示しており、電子連絡帳が園での様子を知る有効な手段となっていることがうかがえる。

「配信頻度を増やしてほしい」「写真の枚数をもっと多くしてほしい」といった要望も見られたが、それと同時に「忙しい中で作成してくださり感謝している」といった保育者への配慮の

声も多く、保護者が保育者の業務負担を理解しようとする姿勢が感じられた。

配信された内容が「家庭での親子の会話のきっかけとなっている」という意見も多く寄せられた。電子連絡帳は「子どもの様子を知り、園内の生活と家庭の生活を結ぶきっかけになるもの」（浅井, 2019, p. 12）となり、単なる保護者と園との情報共有の手段にとどまらず、子どもと保護者をつなぐコミュニケーション支援ツールとしての役割を果たして、子どもの生活理解や親子間のコミュニケーションを促進する効果が期待された。写真によって文章だけでは伝わりにくい園生活の雰囲気や子どもの様子が「見える化」され、保護者の安心感や園への信頼感の向上につながっていると考えられる。

《保育者》電子連絡帳を記入している 16 名

◇ 実施日：令和 7 年 2 月～3 月

◇ 実施方法：1 対 1 のインタビュー(インタビューの途中で保護者アンケートの結果を提示した。)

保育者からは、「保育をしながら写真を撮ることの難しさ」に関する意見が多く寄せられた。特にダウンロードできてしまう懸念があり、子どものアップの写真を控える必要があるため、「上から撮る」「遠景中心になる」といった制約が生じており、途中入園児の増加による保育室の狭さなど、物理的な条件も撮影に影響を与えていた。一方で、負担感は少ないと答える保育者が多く、「配信を通して保育を振り返る良い機会になっている」「遠景写真を撮ることで保育を客観的に見られるようになった」との意見も得られた。園長や主任による確認体制があることで、安心感を持って配信できており、保育の振り返りの機会としても活用できていることがうかがえる。

インタビューの主な内容（抜粋）

<撮影の難しさ>

- ・保育中の撮影は難しく、アップの写真を控えるため上からのアングルになりがち。
- ・途中入園児が増えた分保育者も増え、保育室が手狭で撮影しにくい。
- ・別に撮影者がいると助かる。

<振り返りとやりがい>

- ・園長や主任による確認があるので安心して配信できる。
- ・配信を通して保育を振り返る良い機会になっている。
- ・遠景写真を撮ることで保育を客観的に見られるようになった。
- ・配信回数が増えても大きな負担ではないと感じる。
- ・保護者が電子連絡帳を楽しみにしていることを知り励みになった。

<迷いや課題>

- ・ドキュメンテーション形式にするか遊びの報告にするか悩む。
- ・保護者がどんな様子を知りたいかを知りたい。

<工夫や改善>

- ・週1回の配信で、内容が重ならないように工夫している。
- ・同じようなアングルになりやすいため、工夫が必要。
- ・「写真+ひとこと」形式なら配信回数を増やせそう。
- ・遊びだけでなく給食・午睡なども配信したい。
- ・写真ごとにコメントを入れられる仕組みがあると便利。

また、配信の目的を「ドキュメンテーションとして整理するのか」

「活動の様子連絡として位置づけるのか」といった点で迷いが見られ、保育者は保護者の関心や理解度を踏まえ、最適な伝え方を模索している姿勢が見受けられた。「写真だけでも」「写真+ひとことでも嬉しい」といった保護者の声は、配信の持続性を高めていると考える。アンケート結果を通じて保護者が配信を楽しみにしていることを知った保育者からは、「嬉しかった」「やりがいを感じた」といった意見があり、保育者の意欲や電子連絡帳活用の継続意識を高める要因となっている。

「保育を可視化し、自分の保育を振り返るために欠かせないもの」（浅井, 2019, p. 10）とあるように、写真を通して活動を客観的に捉えることは、日々の保育の質を見直すきっかけとなり、保育者自身の専門性の向上にもつながっていると考えられる。

一方で、保育をしながら写真を撮ることや、すべての子どもを均等に撮影する難しさ、アングルの制約などは、電子連絡帳の継続を妨げる要因となり得るため、撮影環境の改善が必要であると感じた。配信内容の方向性については、保育者にとっては平凡に思える場面が、保護者にとっては新鮮で意味のある情報となることが明らかになり、保護者のニーズを踏まえ、給食や午睡などの日常的な場面も含めることにした。保護者と保育者の視点を取り入れ、効果と負担のバランスを考えながら運用方法を検討することが必要であり、持続的に活用するためには、保育者の負担軽減を考慮するとともに、保護者の意見や満足度のフィードバックが保育者の意欲向上につながると考えられる。

その後保護者には、アンケートへの協力に対する感謝を伝えるとともに、結果の報告を行った。アプリの操作性への意見もあったため、運営会社に対して保護者アンケートの結果を基にフィードバックを行い、改善に向けた交渉も実施したが、即時の機能改善は難しいとの回答であった。保護者には、現段階ではダウンロードできるため、顔がアップの写真掲載は難しいこと、投稿できる写真枚数には上限があることなど、アプリの仕様上の制限があることを丁寧に説明して、理解を得られるよう努めた。

保育者には、クラス毎に保護者アンケートの結果を担任に共有し、室長会で負担のない範囲で改善できる点を検討した。前年度は0歳児クラスが8名でスタートしたが、途中入園児の受け入れにより年度

末には 21 名となった。写真を通して保育室環境を客観的に見ることができ、「子どもの過密さを改めて実感した」という意見も聞かれたため、今年度は保育室の交換など環境面での改善を図った。写真撮影の難しさについては、事務職員が各保育室を回って撮影を行う案も出されたが、今年度のクラス編成で 5 歳児以外が複数担任体制となり、撮影できる環境が整ったこと、また「他者が撮影した写真では文章を書きづらい」との意見もあったため、各クラスで撮影を行う方針とした。さらに、はぐくみ局に問い合わせ、電子連絡帳の内容について説明したうえで、週日案（日誌）の一部「クラス全体の子どものすがた」と兼用が可能かを確認した結果、可能となり、今年度より運用した。また、保護者の要望と提案も取り入れて、日誌と兼用しない場合には「今日の○○ぐみ！」など、一言での簡潔な配信も可能とし、クラスによる配信回数の差が生じる懸念はあるものの、配信回数に上限を設けず各クラスの判断に委ねることとした。その内容を職員会で話し合いながら共有し、改善を加えた配信を令和 7 年 4 月より開始した（表 2 参照）。

表 2 改善点について

項目	令和 6 年度	令和 7 年度
配信回数	・週 1 回	・週 1 回以上、上限なし
写真	・遠くから全体が映るもの	・カメラ目線で顔が正面からアップで映っているようなものでなければ、遠景でなくても可 ・手元だけが映っているものなども可
記載内容	・3 行程度	・制限なし ・週日案日誌の「子どものすがた」と兼用可 ・日誌と兼用でなければ短文でも可

2) 第 2 次調査の結果と考察

《保護者》

- ◇ 実施日：令和 7 年 6 月
- ◇ 実施方法：Google フォームによるアンケート（選択式 11 項目・自由記述 7 項目）
- ◇ 回答数・回答率：有効回答数 93 名（対象者 99 名）、回答率 93.9%
- ◇ 自由記述数：118（項目数 693）、記述率 17.0%

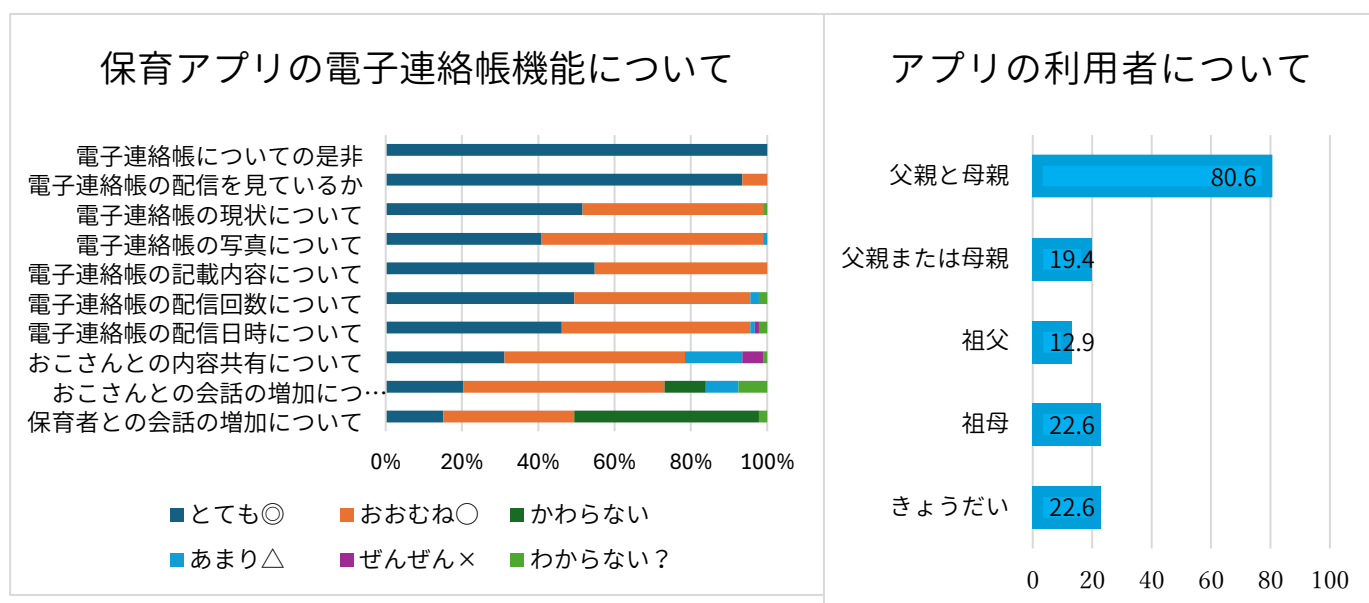


図 2 第 2 次保護者アンケート結果

自由記述欄の主な内容（抜粋）

<改善についての感想>

- ・リアルな反応を記載してくれてありがたい。
- ・子どもから聞けない園での詳細を知ることができ助かる。
- ・電子連絡帳が楽しみで、家族で共有している。
- ・写真をまとめて記録として残したい（本にして販売して欲しい）
- ・担当が変わったこともあってか保育者とのコミュニケーションが減った。

<配信回数などについての意見>

- ・配信回数が増え、園での活動内容がよりわかるようになった。
- ・昨年より増えて嬉しい、毎回楽しみにしている。
- ・先生方のペースで問題ない。
- ・できれば夕方に配信されると家族での会話がしやすい。
- ・先生の負担にならないようもっと少なくても良い。
- ・保育を優先して無理のない範囲で継続を希望。
- ・配信増加を嬉しく思う一方で、保育者の負担が心配。

→「頻度アップを喜びつつ、保育者の負担も考慮したい」というバランス重視の姿勢が見られる。

園での活動の見える化が家庭とのつながりを深め、子どもの生活や成長を共有する手段として有効であることが改めて確認された。これは第1次調査と同様の傾向であり、電子連絡帳が継続的に高く評価されていると考える。特に「子どものリアルな反応がわかる」「活動内容の詳細まで伝わる」といった意見は第1回調査時より増加しており、配信内容がより具体的で充実したものになっていることがうかがえ、家庭におけ

る安心感や園への信頼感が、さらに高まっていると考えられる。また、回答率はほぼ同数であったが、自由記述欄への記入の割合は8.9%から17%へと増加していた。これは、改善の取り組みを前向きに受けとめている保護者が、園への思いや意見をより積極的に伝えようとしていることを示していると考えられ、保護者が園とこれまで以上に関わり合いながら、共に考えていこうとする姿勢ともうかがえる。

一方で、コミュニケーションが減ったという、日常の会話では聞き取ることが難しい保護者の率直な意見も得ることができ、保護者とのコミュニケーションのあり方や、信頼関係を築くための工夫について改めて考える必要性を感じた。「先生方の負担を考える」「無理のない範囲で続けてほしい」といった配慮の声も引き続き多く見られ、保護者が保育者の業務負担を理解しつつ、配信の持続性を重視している姿勢は変わらず継続している。また、第1回調査ではあまり見られなかった「夕方に配信されると家庭での会話が広がる」といった配信のタイミングに関する要望から、新たなニーズが見られた。

前年度との比較では、「配信回数が増えて嬉しい」「活動内容がより理解しやすくなった」といった声が多数あり、改善後の運用が保護者に好意的に受け止められていると考えられる。また、アプリの利用状況を比較したところ、両親ともに配信を閲覧している家庭が約20%増加していた（図1・図2参照）。「保護者が子どもたちはどんな保育を受けているか、どんな育ちがあって保育者がどんな思いでこの活動をしているのかを保護者の方と共有することができる」（浅井, 2019, p. 171）とあるように、日々の保育が見える化できる電子連絡帳の活用は、園と家庭の連携を強化し、子どもの園生活を家庭で共有するための効果的な手段として定着しつつあるといえる。

《保育者》電子連絡帳を記入している室長8名

◇ 実施日：令和7年7月

◇ 実施方法：1対1のインタビュー

インタビューの主な内容（抜粋）

- ・ 日誌の一部と兼用になったことで作業の負担は軽減。
- ・ 若手保育者の文面チェックや指導を行っているが、負担ではない。
- ・ 電子連絡帳やアプリの入力に慣れ、身近な業務として定着。
- ・ 保護者アンケートの声を受けて配信回数を増やした。
- ・ 活動や行事、生活面など幅広い内容を気軽に発信できるようになった。
- ・ 複数担任体制で撮影しやすくなったが、他人が撮った写真で文章を書く難しさも。
- ・ 同じようなカットになりがちで、写真の撮り方は依然として難しいと感じる。
- ・ 写真があることで文章は短くても伝わるという認識でいる。
- ・ 懇談では保護者の喜びの声を聞く機会があった。
- ・ 保護者と配信についての会話が増えた実感は少ない。
- ・ 保護者の反応が分かりにくい。

電子連絡帳の配信が日々の業務として定着し、心理的・作業的な負担が軽減されていると考えられ、「日誌と兼用できる」「義務感なく配信できている」といった意見が多かった。保育日誌の一部と、電子連絡帳を兼ねることができるようになったことで効率化が進み、保育の様子を効果的に「見える化」することにつながっている。

第2回調査では、電子連絡帳の活用をより多くの保育者が肯定的に捉えており、改善による定着と業務負担の軽減

が進んでいることがうかがえる一方で、「写真の撮り方が難しい」「同じような写真になってしまう」といった課題は継続しており、新たな改善の必要性もあった。

また「懇談会で保護者の喜びの声を聞いた」という肯定的な意見がある一方で、「配信についての会話が増えた実感はない」「保護者の反応がわからない」といった声もあり、電子的な情報共有が対面でのコミュニケーションにつながっていないクラスもうかがえた。

3) 研究過程における気づきと考察

保護者と保育者から寄せられた肯定的な意見からは、概ね電子連絡帳の活用が保育の質の向上とコミュニケーションの促進につながっていることが明らかとなった。「『保育者×保護者の連携』は子どもの情報を共有することから始まる」（小泉・佐藤, 2017, p. 4）とあるように、保育の見える化が家庭との信頼関係づくりに寄与していることがうかがえる。特に子どものリアルな反応や活動の詳細が伝わることで、保育への理解が深まり、園に対する安心感や満足度の向上につながっていると考えられる。

保育者への配慮を示す保護者の声からは、職員の業務を理解しようとする姿勢が見られた。これらの声は保育者の励みとなり、改善への意欲を高める要因となっていると考えられ、保育者のインタビューでも肯定的な意見が多く、業務の効率化が進んでいることが確認された。

実際に令和6年度と7年度に同じ年齢児を担当した職員の配信内容を比較すると、文章量が増加していた。活動中の子どもの様子がより詳しく記述されており、子ども同士の会話も含まれていることで、保育の様子がより分かりやすくなり、情報の質が向上していることがわかる（図3参照）。

しかし「書きやすい」「伝わりやすい」と評価される一方で、依然として写真の撮り方について悩む声や、クラスによっては「保護者と配信についての会話が増えた実感はない」といった意見も見られ、対面でのコミュニケーションとの関係性については今後の課題として検討が必要である。

実践が園の方向性に活かされ、それが保護者や子どもの喜びにつながるという実感は保育者のやりがいとなる。実際に保護者からの肯定的な反応や感謝の言葉が職員の励みや喜びとなっていた。

このような成果の可視化（見える化）は、マネジメントの観点からも職員のモチベーション維持に効果的であり、取り組みを通して一人ひとりの意見を尊重し、対話を通じて方向性を共有していくマネジメントの重要性を改めて感じた。これは大豆生田（2022）が述べるリスペクト型マネジメントの理念と合致するものであり、現代の保育現場におけるチームづくりとやりがいづくりに不可欠な視点である。

保育の質を高め、子どもの姿ベースの保育を実現するためには、日常的な実践の振り返りと、保育者同士による主体的かつ継続的な対話が必要であり、そのためには、園全体の「語り合う風土」と「ミッションの共有」が重要である。エビデンスに基づき対話を重ねる機会をもつことで、課題や目標を共有し、協働して改善に取り組むというPDC Aサイクルを継続的に実践していくことができるだろう。

また、1対1のインタビューや室長会、職員会など、個別と集団でのコミュニケーションを重ねる中で、一人ひとりの新たな一面や多様な意見を知ることができ、とてもいい機会であったと感じている。今後は、職員同士が他クラスの取り組みを共有し、互いに学び合う場を設けることで、クラスや年代を越えた職員間の交流を促進しながら、インフォーマル・コミュニケーションの視点も取り入れて、互いを尊重し支え合う関係づくりをさらに深めることを目指したい。今回、行政機関に確認を経て電子連絡帳と日誌の一部を兼用することで、保育者の業務負担の軽減を図った。加えて、製作準備においては保育補助職員や事務職員の協力体制を整えるなど、負担を分散させる工夫も取り入れている。今後もこれらの取り組みを充実させながら、職員一人ひとりの個性が活かされる働き方の提案を行っていきたい。

保護者との信頼関係を築くためには、子どもを共に支える立場として協働し、コミュニケーションの方法を工夫し続けることが重要である。また、開園当初から支えてくださっている地域住民とのつながりを大切にし、近年交流事業に力を入れている近隣の小・中・高等学校との連携をさらに深めていきたい。「園のHappyを形づくるリスペクト型マネジメントの4つの視点—①語り合う風土・ミッションの共有、②職員一人ひとりの良さ・個性の尊重、③個々を活かす働き方のマネジメント、④外部（家庭・地域、自治体）との協働的にかかわり」（大豆生田, 2022, p. 15）を大切にしながら、園での取り組みを職員間で話し合い、協働的に実践を進めていくことが、保育の質の向上につながると思う。そして、子どもにとってだけでなく、職員にとっても楽しく充実した保育を展開できることを目標に、トップダウン型ではなくボトムアップ型のリーダーシップの実現を目指していきたい。

引用・参考文献

- ・今井和子(2016)『主任保育士・副園長・リーダーに求められる役割と実践的スキル』ミネルヴァ書房
- ・小泉裕子・佐藤康富(2017)『写真とコメントを使って伝えるヴィジブルな保育記録のススメ』鈴木出版
- ・浅井拓久也(2019)『活動の見える化で保育力アップ！ドキュメンテーションの作り方&活用術』明治図書出版
- ・大豆生田啓友(2022)『園のリーダーのためのリスペクト型マネジメント1組織改革の4つの視点』フレーベル館